

15) シュンラン=春蘭

シュンランはラン科の常緑多年草で、日本各地の低山地や山林内の乾いたところに自生し、日本以外では朝鮮半島や中国にも分布する、いわゆる東洋蘭の一種である。高さは約 20cm ほどで、葉は広線形で長さは 20~35cm ほどの革質、縁には粗く細かい鋸歯がある。茎は球形に縮まった小型の『偽球茎』になり、新しい偽球茎は古い偽球茎の根元から出て株立ちになる。早春、前年の偽球茎の根元から 10~20cm の花茎を出して、その先端に一つまれには二つだけ花を咲かせる。花は径 3~5cm の大きさで緑色を帯び、紅紫色の斑点がある。和名の由来は漢名『春蘭』の音読みである。別称としてはホクロ、エクリ、ハクリなどがあり、これは唇弁にある紫の斑点をホクロに見立てたものである。また『ジジババ』などと呼ぶことも多く、この呼称は一説によれば、蕊柱(ズイチュウ)を男性器に、唇弁を女性器に準え、一つの花に両方が備わっていることから付けられたという。林の中に多く見られるところからヤブランとも呼ばれている。学名は『*Cymbidium goeringii*』で、属名は船の形という意味で唇弁の形に由来し、種小辞は植物採集家ゲーリングの名に因む。

ラン科植物は種子の発芽に際して、周囲の環境から自分に適合する菌類を探し出して、この菌類から成長に必要な栄養素を得ることが知られている。いわばいい同棲相手を見つけて、その収入に頼って生活するわけである。しかしシュンランの実生は、かなり長期にわたって適度に育つまで、ショウガの根茎によく似た姿で、腐生植物的な地下生活をおくって発芽を待つ。この発生過程は進化のプロセスで獲得したもので、もともとは寒冷地に適合するためのものと考えられている。このため熱帯性のシンビジウムにはこのような地下生活の期間はなく、地表で発芽するとすぐに成長する。これに対して温帯産のシュンラン属の多くが、このような地下生活を経験することは、自然界の不思議さを改めて教えられたような気がする。またシュンランの種子は撥水性が強く、西洋蘭のように無菌培養地に播種しても発芽することはない。今まではこのようなメカニズムが解明されず、人工的な繁殖ができなかったが最近やっと、経済的な繁殖が行なわれるようになってきた。

寛文 4 年(1664 年)に水野元勝により編纂された『花壇綱目』(カダンコウモク)には赤花種が記載され、その栽培法が記されているところから、江戸時代の初め頃にはすでに栽培されていたことがうかがえる。春蘭にはもともと変種が多く、白色花系の『源氏香』、赤花系の『平氏香』などに古くから大別され、形変わり花や、斑入り葉品種などが特に愛培されてきた。今後の新品種が待たれるところである。

春蘭は古くからアカギレの特効薬として知られ、根茎を焼いたり煮たりしたときに出る粘液をヒビやアカギレに用いてきた。シュンランは食用にもなり、花を塩漬けにして保存し、湯を注いで、桜湯のようにして『蘭茶』として飲むこともあり、生の花をそのまま酢の物に、あるいは湯がいて和え物にすることもあった。



シュンランの花も、最近めっきり少なくなってしまった植物である。筆者の幼かった頃には、さいたま市の疎林中でも、よく見ることが出来たのだが・・・(埼玉県嵐山町)。



ジジババなどとも呼んで親しまれたシュンランの花(埼玉県嵐山町)。



大きな株に育っていくつもの花穂を出した春蘭(東京都神代植物公園)

[目次に戻る](#)